



今夏行われた「ルーブル美術館展」で展示室を冒険するアート・エデュケーターと子供たち

今の社会で、人々がもっとも関心ある、解決しなければと感じている事のひとつは「それぞれの人が社会生活の中で簡単に孤立してしまいがち」ということではないでしょうか。あの3月11日の大震災以降ニュースなどを聞くたびに、私たちはそのことを随分と考える機会がありました。人々が互いに孤立しないために重要な事は2つあります。ひとつは誰かと関わる機会を持ちつづけること、つまり「参加」をする事。そして2つ目は、参加を楽しむ感性を養わせ、今度は参加を誘う「つなぎ手」になることです。このつなぎ手となる心持ちを持った人々が世の中に増えたら、私たちの不安はもう少し減っていくのかもしれない。

ただ、参加する事が大切だとわかっていても、人々のライフスタイルが多様化する中で、その多様性を受け止め合えるような「できれば義務的でない」「自然と対話が生まれる」参加の場や機会があるか

# アートが促す「参加」と「包摂」

番です。アートや美術館の存在意義のひとつは、人々の営みの多様性を担保することです。美術館で行われる展覧会は、古今東西の人間が生み出した創造物を丁寧に見せながら、人間のさまざまな価値観から生まれた営みを肯定しつつ、検証する試みでもあります。その美術館の性質を活かして、美術館を拠点に多様な価値観を受けとめ合う、新しい参加の回路づくりを目指す活動を、東京都美術館がリニューアルを機会として、隣の東京藝術大学と

びのびゆったりワークショップ」など、様々なプログラムはとびラーがプレイヤーになる事で生まれてきました。詳細は「とびラープロジェクト」や「Museum Start あいいうえの」で検索し、各ウェブサイトでご覧下さい。とびラーの動きは、社会への主体的な参加のあり方の一形態であり、さらには3年任期で卒業のものは、また別の形でそれがコミュニケーション回路を作る、つなぎ手になることが目指されています。

では、美術館がなぜ新たなコミュニケーション回路をつくるのにプラスに働くのか?と考えてみます。作品には作った人の主体的な思いが宿り、またそれを誰かに伝えようとする

す。そうした展示物が何千年も前の人々の生きる力を現代の私たちに届けることもあれば、今を生きるアーティストの生々しいエネルギーを伝える事もあります。私たちは展示室で、作品を視覚だけで鑑賞しているようで、実は作品から発せられるそうしたエネルギーをシャワーのように浴びているのかもしれない。パワースポットのような美術館が、人々の主体的な「参加」を誘う場となり、また社会を「包摂する」、つまり人々を新しい形でつないでいく力に必ずなる。今、とびラーと共に動きながら感じています。

(東京都美術館学芸員、アート・コミュニケーション担当係長)

## 新美術時評

＝ 美術と教育 ① ＝

稲庭彩和子

といえは、そう多くはなく、人々は自分の足元を強くするような、新しいコミュニケーションの回路を求めつつも、使い慣れた回路のなかでたずんでしまうことがあります。そこでアート、そして美術館の出

連携し、始めました。そのひとつ「とびラープロジェクト」では、一般から募った約120名の市民がアート・コミュニケーター(愛称:とびラー)として、ユニークな活動を展開しています。とびラーは無償の活動ですが、彼らは美術館のサポーターという位置づけではなくプレイヤーです。美術館の学芸員や大学の教員とともに、美術館を拠点として、文化や社会への「参加の回路」を作っていく主体的なつなぎ手になります。これまで学校と連携した授業「スペシャル・マンデー」や、誰でも参加できる「あなたも真珠の耳飾りの少女」とびらボードでのCO2や、障害のある子も無い子も一緒に造形や鑑賞活動をする「の



東京都美術館でアート・コミュニケーターとして活躍する「とびラー」の皆さん(前列右が筆者)

の世へ自ら参加していることとする主体的なエネルギーが幾重にも重なって宿っているので